

## 牛島春子引揚げ作品『笙子』論

—主人公のつながりをめぐって—

崔 佳 琪

### Abstract

This paper focuses on *Syouko* by Ushijima Haruko as the object of study which is the first work of the collection about the literature on repatriation, pays attention to the relationship between the character "I" and *Syouko*, and discusses the true internal relationships between the two. The result of investigation shows that *Syouko* exists as a doppelganger of "I", and sacrifices herself to replace "I". In addition, "I" changes the view of "death" at the end of the work, which means "I" farewells to the past and will face the starting point of a new life.

キーワード……笙子、引揚げ、戦後、女性

### はじめに

牛島春子の小説『笙子』は一九四七年一月に野田宇太郎主宰の文藝雑誌「藝林間歩」に発表された作品である。この作品は牛島が満洲から引揚げてきた翌年に発表されたものであり、彼女の戦後の文学活動の出発点とも言えるものである<sup>(1)</sup>。

『笙子』は、牛島自身が敗戦後、満洲で三人の子供をつれての放浪・避難生活の体験を基盤として書かれており、主要登場人物は、「私」と笙子という二人の女性である。作品の冒頭は、笙子の死から始まり、そこからフラッシュバックし、二人の若い時から親密さを描き、さらに満洲時代から敗戦にかけての二人のつながりとそれぞれ異なる人生の道を踏み込んだことを描いている。

ほかの引揚げ体験を語る手記や記録のように引揚げ途中の「辛さ」に重点が置かれる作品とは異なり、本作品は明らかに引揚げの辛酸や悲惨さのあり様を読者に伝えることのみを目的としたものではないと考えられる。言い換えれば、作者は、作品の時代背景を「敗戦直後から日本に引揚げてきた」という時期に設定しているが、作品の本当のモチーフは二人の女性主人公のつながりに重点が置かれているように見える。さらに、作中におけるいろいろな描写に基づき、二人の繋がりを詳しくみると、作者は表面的なつながり（要するに「友情」のことであろう）を語りながら、裏により深層的な問題が秘められていると感られる。つまり、作者は「引揚げ」という背景を借りて、二人の「友情」における内面的

なものを書きたかったのではないかと筆者には見受けられた。そうだとするならば、作者がほんとうに表現したかったこととは何だったのだろうか。また、作者はなぜ、敗戦直前から敗戦後日本に引揚げてきたというような特別な時点を選んで、この題材で作品を書いたのだろうか、というような疑問が生じてきたのである。

一方、作品の結末部では再び、「死」のことを取り上げ、冒頭部分の「死」と呼応しているように見られ、作品の原点に回帰させたように見える。そういう意味では、「死」という要素が作品全体を貫くもう一つの重要なモチーフだと見られる。そうだとすれば、作品全体において、二人の関係と筧子の「死」の間には、内面においては、一種の必然性による関連があると考えられる。

ここで牛島の戦後の文学活動を全体的にみると、戦後に書いた作品の素材は、彼女自身の過去の体験を回想するものが多かった。例えば、満洲からの引揚げ体験をはじめ、在満時代の生活を回想するものや、もっと早い時期の労働運動の体験<sup>2</sup>を元にしたものがある。つまり、牛島の戦後の文学活動は回想から始まって、敗戦直後の引揚げ体験に限らず、もっと昔の体験も含めて、一つの回想的文学宇宙のように見ることができるといえるだろう。これらの過去の体験を素材とした作品は、牛島の戦中に書いた満洲の社会、異民族、戦場現場などを描いた作品と比べて、一つの大きな転換を図ったのではないかと思わざるを得ない。しかし、これはただの推測であるが、その「回想」を通して、作者は過去における体験を記録しただけののだろうか。筆者はそうではない

と思う。作者は戦中の混乱による不安な日々から戦後の再建期における日本に帰り、改めて以前の生活を思い出し、文学作品で表現することで、戦中の体験の再認識を訴えようとしたと考えられる。これによって、作家・牛島は自分の体験を通じて何を言いたかったのか、あるいは、何か普遍的なものを見出そうとしたのか。読者としては、より冷静かつ客観的に認識する必要があるだろう。これらの問題を見据えるために、まずは、戦後の第一作『筧子』について十分に考察する必要がある。これらの疑問を考察することによって、牛島の戦後文学における基本的な姿勢を見出すことができるだろう。

本稿は以上の問題意識に基づき、二人の繋がりについて考察する。さらに、結論に基づき、作品結末部における筧子の「死」が、二人の「つながり」とどのように関連付けているのかについて検討を進めることにしたい。具体的にいえば、次の三点に注目して考察を進める。

- ① 作品を貫く二人の女性登場人物「私」と筧子二人の「あざなはれた一本の縄」という関係は、内面的にどのような秘められた意味が暗示されているか。
- ② 筧子の不幸による「私」の自責はどのように解釈してよいのか。

③ 筧子の死による「私」の変化は何を意味しているのだろうか。以上の三つの疑問を説明することによって、作品全体の評価を試みたい。

さて、これまで『笙子』に関する研究は、ほとんどなかった。作品内容の紹介や、個人的な感想のような論評風のものはいくつかあるが、テキストに基づく本格的な作品論は、皆無といっても過言ではない。それらのものの中心は、作品からみた敗戦後の女性たちの持つある種の「解放感」、主人公の生き抜く才覚、たくましい生活力というような時局との関連を匂わせるような方向である<sup>3)</sup>。

## 一、作品梗概

作品はおもに「私」と笙子のつながりをめぐって展開しているが、笙子の交際・結婚及び結婚後の生活については、三人の男性とのエピソードに分けて描かれている。次は、作品のあらすじを紹介し、笙子はどういう劇的人生を過ごしたのかを確認しておく。

青木笙子は敗戦後、満洲から日本に帰ってきた後、まもなく病院で亡くなった。「私」と笙子は若い時から「あざなはれた一本の縄のやう」に親しんだ関係であり、「私」には笙子を幸福にしてやらねばならぬ責任を感じている。夫の中学時代の後輩である光島さんを笙子に紹介した。光島と笙子が会ってからは、光島さんは笙子と結婚することを承諾したが、その後なかなか音信がなく、結局婚約を破った。さらに、まもなくして他の地に転勤した。

「私」は「笙子の幸福」について、改めて思い出した。そして、

笙子の「幸福」は彼女自身が自分の手で探し出すもの以外にはないと確信するに至る。かつて、笙子が幼馴染の卓次という人との交際をやめたことを私は思い出す。その時、笙子は何人かの男性から想われたが、結婚にはいたらなかった。最後に笙子は「私」の友人を通じて紹介された川瀬氏という妻を亡くし、二人の子供がある男性と結婚した。しかし、笙子の川瀬家での生活は期待に反して非常に苦しいものであった。性格の悪い義母と賭け事の好きな川瀬氏との生活は、笙子にほとんど楽しみを与えなかった。まもなく川瀬氏の転勤のため、笙子一家は奉天に引越した。「私」の夫も召集され、彼と全然連絡が取れなくなり、一人でジレンマの中であって、淋しく苦しい日々を過ごす。

敗戦後、「私」は笙子の奉天の家で寄食生活をした時期がある。兵隊に女性を見せないため、女性たちは防空幕を降した部屋にじつとするしかない。ある日、「私」ははじめて街にでる。私たちは不必要な恐怖に囚われていたことに気づき、男装して街を歩くも、案外に爽やかで楽しかった。「私」は再び奉天に戻って笙子を訪ねたが、彼女は病気となり、生活はさらに苦しいものとなる。それでも、笙子は川瀬と義母を責めることはなかった。病身の笙子はどのようにして日本に戻ったのか、「私」は帰国前の準備に忙殺され、彼女に会えなかったの、分からなかった。

「私」が日本に戻って二三日後、笙子が福岡の病院に入院したことが分かり、その後、笙子が亡くなったと知る。もともと死が恐かった「私」は、その時から自分の傍に何時も笙子がいるかの

ように、死を恐がらず親しみすら感じはじめた。

以上、作品の梗概の紹介を終える。

梗概を読んで分かるのは、作品は「私」と筥子のつながりをめぐって、主に「女学生時代」、「再会から川瀬と結婚するまで」、「結婚後の生活」、「敗戦後」という四つの段階に分けられる。女学生時代から親しんだ「私」と筥子という二人の親友同士の女性が、敗戦によって「あざなはれた一本の縄」のように、会ったり別れたりすることを描き、また筥子の不幸な結婚と最後に死を迎えた悲惨な運命を語ったものである。とくに、物語は二人が「十年間会っていない」状態から、新京、奉天、營口など、複数の場所での出会い、お互いに相手の生活に関わったりすることによって、二人が時間的、空間的にさまざまな体験をしながら、「私」の内心の独白なども織り交ぜて進行する。

## 二、「あざなはれた一本の縄」——その両面を通して

本節では、作品を検討する第一歩として、「私」と筥子の関係について「あざなはれた一本の縄」という一文に注目し、この「一本の縄」のような関係について、表面に意味するものと深層に隠されたものとは、何だったのだろうかという問題について、それぞれ検討し、さらに、テキストに基づいて、二人の関係は、作品の中でどのような役割を担っているかを見ていく<sup>4</sup>。

この「あざなはれた一本の縄」という表現は、作中では二回出

てきている。一回目は作品冒頭で、「私」と筥子のつながりを語る時に言及されている。ここは作品全体において、二人の関係をはつきり示す役割を果たしていると思われることができる。次はこの部分をAとし、すべて引用する。

A. それはその年月、私と筥子はあざなはれた一本の縄のやうであつた。ひとは私と筥子が姉妹か従姉妹でもあるやうに良く似てゐると云つた。共通したある氣質が、異つた容貌をもつ私と筥子をいつかそのやうに似通はせたにちがひない。もつとも筥子が私の家で起居するやうになつてから、私たちは同じやうな氣質以上にちがつた性質も沢山認めあつたのであるけれど、二人の一番根本的な氣質のちがひは、私がずばらで暢気な女であるのに反して、筥子は神経質で、いつも光の後に忍んだ暗さを忘れることの出来ぬ女であつたことである。私たちは女同士の他愛なさでそれはきつと私が春産れたせいであり、筥子が秋産れのせいだからだらうと話し合つてゐたのであつた。（傍線筆者、以下同）

と、私と筥子の間に繋がっているものを明らかに描いている。この部分は小説全体の基調を大きく支配するにいたつていふ言つても過言ではない。

そして、二回目は、筥子が結婚後、毎日、不幸な生活を送っているのを見て、私の内心の独白を描いていふところであり、こ

では、Bとする。

B. 私が笹子程度に不幸になつてもいいと思ふやうになつてゐた。

私はやはり笹子と自分をあざなはれた一本の縄として感じてゐたのだ。

そこで、この「あざなはれた一本の縄」というのは、具体的に何を意味しているのだろうか。これは、作品を説明するのに重要なヒントだと考える。次はテキストに基づき、この表現における表面と深層という両面から検討したいと思う。

最初に、その「あざなはれる」という言葉の意味の確認から始める。『日本国語大辞典』によれば、この語彙について、下記のよう

【<sup>あざな</sup>糾う】からませるようにして交え合わせる。糸などをより合わせる。縄をなう。

例…あざなえる縄

禍と福とは、お互いにつきまといつて離れないことをたとえていう。太平記（14C後）二九・將軍親子御退失事「吉凶は、<sup>アザナヘ</sup>糺る縄の如く、哀楽時を易たり<sup>かへ</sup>」

\* 塩囊鈔（一四四五、四六）三「吉凶は、<sup>アザナヘル</sup>糺る縄の如しと云り

実とに縄を糺<sup>ただし</sup>見るに左に成り、右に成り、二筋の糺相交りて縄の躰を成が如く」（5）

とあるように、この言葉は、つねに文章語として使われているが、日常会話では使用頻度は高くないとみてもよい。特に「あざなえる縄」を例として挙げている。さらに、比喩的な意味として、おもに「福禍」や「吉凶」などのような正反対する事物の両面が互いに絡みあつて、離れないことに用いられる。

さて、作者はなぜ、わざわざ使用頻度が高い言葉で、二人の関係を描くのか。作品における「一本の縄」の深層の意味について考察しなければなるまい。次は以上の解釈に基づき、表面的と深層の両面から検討していくこととする。

### 1、表面的意味（二人の親しみ）

テキストの通り、二人は、若い時から、親しんできたのである。以上の引用のほかに、具体的な描写を見ると、全体的な印象と、前述した四つの時期に分けることができよう。

- a. 全体…「私たちは離れては逢ひ、遇つては離れたりしながらも、赤い一筋の糸のやうに友情をつないできた。」（二二二頁）
- b. 女学校時代…「私は十四の時から親しんだ舊姓の青木笹子と呼びたい。この名の中に私の二十年間の、少女から女へと成長

- していつた思ひ出の数々がたゞまれてゐる。」（二二〇頁）
- c. 再会：「それに一番大切なことは、私と笙子は十年ぶりで會つてゐないといふことであつた。」（二二三頁）
- 「私と笙子に楽しい日々がはじまつた。（略）この頃が一生で一番楽しい時期であつた、とあとで笙子は語つた位であつた。」（二二五頁）
- 「もつとも私もある時期はそつくり笙子のやうな娘であつた。」（二三〇頁）
- d. 結婚後：「川瀬氏の家は私の家からあまり遠くない所にあつたので私は買物に出かけた折などちよいとよい笙子がどんな生活をしてゐるか覗きによつた。」（二三二頁）
- e. 敗戦後：「それから先は引卒者達にもあてがないといふ疎開の旅をつづける気になれず単独で降して貰ひ、笙子の家に行つたものであつた。」（二三五頁）
- 「私たちは再び奉天の川瀬家に戻つて来た。」（二三六頁）
- 「川瀬家にとつて何のたしにもなくなつた私は本當に二度と川瀬氏やお母さんに迷惑をかけて、笙子を苦しめまいと決心してゐたのに、やはり私はさうするより他に仕方がなかつたのである。（中略）私が南下した理由の一つは、無意識に笙子と會ひたがつてあつたせいでと氣がついた。」（二三八頁）
- 「笙子は店に私を訪ねて来た。」（二四三頁）
- 「旅の疲れがなほつたら私は笙子に會ひにいくつもりであつた。」（二四七頁）

以上の引用の通り、二人の繋がりについて、しばしば作中に出てきている。周囲の環境や個人的事情が変わつても、女学校時代から二人は、ずっと繋がっているように見える。要するに、二人は長く離れては會ひ、會つては離れ、二人を繋がっている無形な「糸」は二人の女学校からの友情のことだと解釈できる。二人の友情の深さにより、長年会つていなくても、お互いに見えない「糸」で繋がっていると見える。そこで、「あざなはれた一本の繩」における表面的な意味は、二人の深い友情による切れない運命のことを指していると言える。したがって、深層的な意味は何だろうか。考察は次の節に移りたいと思う。

## 2、深層の意味(二人の対立)

まず、前述した辞書の解釈から、「あざなえる繩」というのは、その絡みあう双方が、「福と禍」、「吉と凶」など、対立している関係を持つことが分かる。しかし、「私」と笙子とでは、作中でそのような対立的関係に見えるかどうか。無論、表面上からは、「福と禍」のような完全に対立している関係ではないと思われる。しかしながら、テクストをよく吟味すると、二人の個性上には、いくつか対立的な要素が潜んでいることが窺える。次に、二人において、深層的に対立する関係は、どのように描かれているのか、について、同じくテクストに基づいて確認しておきたい。

まず、作品冒頭部分で、明らかに描かれているのは、「私がずぼらで暢気な女であるのに反して、笙子は神経質で、いつも光の後

に忍んだ暗さを忘れることの出来ぬ女であつた」という二人の違い(対立)である。さらに、「それはきつと私が春産まれたせいであり、笙子が秋産まれたのせいだからだらう」とその性格上の違いの内的要素を説明し、これが作品における二人の「つながり」であるとともに、唯一の二人の「違い」についての描写である。しかし、作品全体を読んでみると、多くの細かい描写から、「気質」のほかに、二人にはさまざまな「違い」があることが分かる。さらに、この「ちがいは「気質」を超えて、二人の関係を説明するための重要なヒントであると言える。ほかには、どんな対立要素があるのか、確認しなければなるまい。

(a) 全体:「私がずぼらで暢気な女であるのに反して、笙子は神経質で、いつも光の後に忍んだ暗さを忘れることの出来ぬ女であつた」(二二〇頁)

(b) 女学校時代:「笙子」「私は男の子一人産んで、二十七で死ぬだらうと思ふわ」。(「私」)「私は多分結婚なんかしないわ」(二二二頁)

「事実是不思議なことに私がグループの誰れよりもはやくまつ先に結婚してしまひ、美しい笙子は一番おかれて、…」(二二二頁)

(c) 再会:「私あの頃は、あなたがまだ光島さんを良い人だと云つてゐたので、やつぱり私とあなたは立場がちがふんだと思つてゐなければ、結局憎めない人だわね」(二二八頁)

「ただ笙子のは潔癖と云ひ切つてしまへるけれども、私の娘らしくなく傲慢であつた。」(二三〇頁)

(d) 結婚後:「私程度に幸福になれないならば、私が笙子程度に不幸になつてもいいと思ふやうになつてゐた。」(二三五頁)

(e) 敗戦後:「私はすぐに、私も無事に帰りついたことを報せるハガキを笙子にあてて出した。」(二四七頁)

「姉さんから笙子が亡くなつたことを報せるハガキが来たのであつた。」(二四七頁)

以上まとめているのは、テキストから読み取つた「私」と笙子のいわゆる「対立的」な部分である。これらは、この作品の重点に置かれる所だと考えられる。なぜなら、作品全体は、「私」と笙子の友情を語っているようであるが、実際に作品の深層における二人の繋がりの真相を説明したかつたのではないか。特に、最も注目すべきは、作品の結末部における、笙子の「死」に伴い、二人の最も対立的なものを明らかに浮き彫りにしたところではないだろうか。要するに、笙子は、もう亡くなった人であるのに対して、「私」はこれからも、生きていかなければならない。というよくな、二人がはつきりした「生」と「死」という正反対な存在になつたことである。作者は生と死という鮮明的に対立している両方をもつて、「私」と笙子の最終的運命の結果を示している。

以上の考察から、二人の関係は単純な親友的關係を超えて、二人には性格・考え方など、様々に対比的なものがある。それらは

潜在的な一種の繋がりのように見えるといえよう。作品の最初に書かれている「あざなはれた一本の縄」のようなつながりについて、次のように解釈してもよいだろう。要するに、このような関係とは、表面的親友関係にととまらず、二人にはたくさんの対立点が存在し、二人は親しみながらお互いに依存しているような関係であると言えるだろう。そうすると、二人が表面的なつながりだけではなく、お互いに影響しあう点は、作中で具体的に、どのように表現されているのかについて次の節で考察したい。

### 三、「私」における自責

前節では、二人の間にある「あざなはれた一本の縄」の関係について考察した。その結果、二人の間にある「親しみ」の裏では、対立しているものが多く隠れていることが分かった。つまり、二人はただの親友ではなく、性格などにおいては、様々な相違点があつて、さらにまったく正反対の面も存在していることが明らかとなった。

本節では、作中で、頻繁に出てきた「私」の筧子に対する自責について、二人のつながりと同様に、深層面において、何を意味しているのかについて検討したい。

作品は、筧子の結婚をめぐる描いているが、この結婚は最初から「私」と分けられない関係がある。作品の最初の部分では、二人の若い時の友情を回想した後、作者の筆が一転し、筧子の結

婚について、「私」が深く「自責」の気持ちと内心における「苦しみ」を持つことをはっきり描き出している。これは、作品冒頭の二人の親しい関係と比べると、やや飛躍的に感じられるが、しかし、これこそ二人の関係に繋がる重要な糸口だと筆者は考える。これを手がかりにして、筧子と「私」の間で、「私」の「自責」は二人のつながりとどういう関係があるのかについて、検討する必要がある。

まず、「私」の自責について、作中で明らかに示しているところを確認する。

⑦ 筧子を不幸な結婚に追ひやつた——それは同時に死への道でもあつた——責任の一半がたしかに私にあるのだと率直に認めるとき、私は云ひよのない苦しみを感じてくる。(二二二頁)

⑧ 光島さんと並んでゐる私は何かしら説明出来ぬもの悲しさと、軽い自責に襲はれてゐるのだつた。(二二四頁)

⑨ 無論理由もなく婚約を破棄された筧子の女としての傷手は大きいし、筧子をよびよせた私達の責任も由々しい。(二二八頁)

⑩ 私は美しく清潔な心をもつた筧子をつまらぬ結婚で汚したくないと大事がるあまりかへつて筧子の結婚への道を私が阻む結果になりはしないかと自省してゐたのであつた。(二三二頁)

⑪ 川瀬家のお母さんの位置といふものに不注意だつた自分の考へへの若さがくやまれた。くやまれるだけではない、何か取りか



へしのつかぬことをしでかした深い後悔に私はくるしめられはじめた。けれど私は又別な方面から、自分のこととして笙子を反省してみる。(二三三頁)

㊦ 私は何か笙子に濟まないやうな気持で二ヶ月半の新京での生活を送りかへつていった。(二四〇頁)

㊧ ……私の方こそ、私が川瀬さんに迷惑をかけてゐることがどんなにあなたの立場をつらくしてゐるか。私の方こそあなたに濟まないのよ。(二四七頁)

私の笙子に対する「自責」或いは「反省」の気持ちが作中で七回出てきている。最初に紹介してあげた光島のことから、夫になつた「川瀬」のこと、さらに、最後笙子が死に至るまでは、この自責がずっと貫いているように見える。「私」は笙子に対して、責任があるように感じているため、常に笙子の幸福を気遣う。ついには彼女を助けてあげたいという気持ち<sup>①</sup>が作中でしばしば描かれている。このような気持ちは、光島さんの紹介が失敗した後、私の内心の独白には明らかに書かれている。

けれど、私には尚背負ひ切れぬほどのおおきな問題が残つてゐた。私はあけてくれ、ホテルで働いてゐる笙子のことを考へる。私には笙子を幸福にしてやらねばならぬ責任があつた。けれど、幸福とは一体何であらう。少なくとも笙子の幸福は、究極は笙子自身が自分の手で探し出すもの以外にはないのだ。

以上傍線の部分が描いてるように、最初、「私」は笙子の幸福に責任があると感じているが、笙子が幸福にならなかつたため、「私」は自責していると見られる。しかし、その後の「私」の独白はすぐ、「笙子の幸福は笙子自身が自分の手で探し出すもの」と正反対の方向に転換していく。つまり、「私」は確かに笙子を幸福にさせたい責任を感じているが、無意識には笙子が自分自身の努力・自分なりの生き方によって幸福になつてもらいたい気持ちもある。しかし、実際の出来事では、どうなつてゐるのだろうか。この問題について、作中における、笙子とかかわつた三人の男性登場人物から検討しなければならぬ。それらを検討することによつて、「私」自身の自責の真相を掘り出すことができるだろう。

#### 〈その一〉<sup>みつま</sup>光島（「私」の夫の中学時代の後輩）

「私」と夫の紹介で、笙子と光島は出会つた。この初対面の後すぐに、光島は笙子と結婚することを決めた。しかし、作中の描写から見れば、笙子は光島と初対面の後、彼に対してあまり熱意を感じていなかった。ただ「嫌いではないのよ」との一言で済んだ。逆に「私」は光島が大変好きになつてゐた。このように、同一人物に対する二人の異なる反応は、どのように理解したらよいか。これは前の描写との繋がりも見なければならぬ。作品

冒頭部分の「私」と筥子の性格の違いが現われている。光島について、「今まで私の知った世界でなかった明るく近代的なタイプの人。頭がよくて、……」と「私」は彼をほめちぎっている。筥子は光島に特別な興味を持たなかったが、仕事場での光島とのやり取りから、次第に光島を好きになっていったのである。

ああ、私これでとてもさつぱりしたわ。はじめてあの人の  
びのびと話せたわ。三十分位雑談したのよ。やつぱりあなた  
が云つてゐたやうにあのいい人ね。……

と光島への好意を示した。しかしながら、結局、筥子と光島は結婚に至らなかった。その理由は光島が婚約を破って音信なしになつてしまったからである。もし、筥子が彼と結婚したとすれば、筥子にとつての幸福（「私」が準備した「幸福」と言えるだろうが）は光島によつて、実現できたかもしれない。振られることによつて、「私」が筥子に与えようとした「幸福」は実現できなかったのである。そのため、「私」の自責はこの時点からわき起こつていたのである。この後に「自責」は何回も出てくるが、作品全体において、光島による「自責」は明らかに、発端的な存在であるとともに、根本的な役割を果たしているのではないかと見ることができ

きる。これに対して、「私」の光島に対する見方の変化は、どのようなものであるのか。最初の印象はよかつたが、以下の描写から見れ

ば、全く別のものになつてゆくのである。

光島と初対面した時には、次のように描かれている。

私はすぐに光島さんと親しくなり、光島さんが私のうちに二泊する間に、その明るく屈托なげな人柄にすっかり惹かれるといふことが実は私の一番いけない性格の一つだつたのだ  
が……

しかし、結局、

私も今度のことに対する光島さんの態度から、だんだんと光島さんといふ男性に対して冷静になり批判的になつて来た。さうなると私は厳しいのである。とても筥子のやうにさりげなく遠ざかるといふことは出来ない。私は次第に怒りに燃えはじめ、あらゆる角度から光島さんを解剖しはじめた。

というように、「私」における光島に対する態度は、完全に変わつてきたのである。つまり、時系列をおつて大好き↓不安↓批判↓怒りとなつていく。

注意すべきは、「私」と筥子の光島に対する見方は、時系列をおつて、逆方向に変化していることである。この変化は、作品冒頭部で描かれている「あざなはれた一本の縄」という関係を表面化したといわざるを得ない。つまり、光島との交際において、二人

の関係が、すでにねじれているように見える。これは、ちょうど「あざなはれた一本の縄」という関係と重なっているのではないか。

したがって、二人のねじれた関係の裏には、さらに「私」の自責が潜んでいる。この「自責」はどういうことが暗示されているのか。作中の第一段階と見られる光島関係のシーンで、私の「自責」について考えると、笹子に光島を紹介することが失敗だったことに対する「自責」は言うまでもないであろう。しかし、その根底に何が秘めているのか。深層的「自責」の意味は、それほど簡単ではない。なぜかという、前の引用の部分でも示しているが、「私」夫婦と笹子と光島、四人が面会する時、「私」はすでに軽く自責を感じている。笹子と光島は初対面なのに、「私」の自責はどのようにして生じたのか。

この自責が出てきた前の描写を見れば、この疑問が解明できさうである。

料理が運ばれて一同が席につくと、私の位置は丁度光島さんと向ひ合せになった。(中略)まるで私が当の見合の相手でもあるやうになにかしら恥ずかしく顔が赫らんで来るやうでその気持ちのやりばに困るのだった。食事が済んで笹子は一寸座を外し、私たちはすりに並んで何といふこともなく博多の町の雑踏を眺めてゐたが、……

「私」が光島の席と向い合わせとなったため、しだいに「私」は恥ずかしくなってきたと描かれている。つまり、「私」は恥ずかしく感じてから「自責」に襲われていたのである。しかし、この点だけを見れば、前の叙述とやや矛盾的なものを感じるようである。なぜなら、この前にも引用された「私はすぐに光島さんと親しくなり」とか「すつかり惹かれる」とか描いている。これに対して光島も、「僕はこの家からかへると、そのあとどうしてか憂鬱になつちやつて、もうどこに遊びにいく気もなくな」つたように、「私」の家に慣れてきたように描かれている。二人は完全に親しい友人関係なので、恥ずかしくなる理由は特にないのだろう。そうすると、この「私」の気持ちの急変は、「私」の性格の深層の中に矛盾した要素が隠されていることを暗示しているのではないか。つまり、その後にも出てきた「自責」というのも、「私」自身が神経質であることの具体的な表現だと言える。ここで、また、作品冒頭部分における「私がずぼらで暢気な女であるのに反して、笹子は神経質で、いつも光の後に忍んだ暗さを忘れることの出来ぬ女」という描写と逆に、「私」のはじめてのこの「自責」では、「光の後に忍んだ暗さを忘れること」が出来ない内面的に潜んでいる性格が反映されたと言える。言い換えるなら、この時点における「私」は笹子と同じ気質を持つようになった。これは、二人の個性における真相が、表面に浮かんできたのだと言えよう。「私」は、裏面ではすでに、笹子の身代わりになったのではないか。この時点における自責とは、「私」の内部に潜んでいるもう一つの生

き方が、表面化されていたのではないだろうか。

光島について、もう一つ重要視しなければならないのは作中において、筧子が光島と再会した後、以前の光島への印象がすっかり変わったことである。これは、作品における重要な転換点だといえる。つまり、最初に「私」がいくら説得しても、筧子はなお懷疑する気持ちを持っていたようだったが、実際に自分が光島と少し深く接触した結果、「私」の意見を認めるようになったという変化が起こったのである。したがって、この変化が何を意味しているのかについて述べるに、筧子は最初から「私」を信じていなかったのだろうか。そうではないと思う。その気持ちに変化する前後の筧子を見ると、筧子自身の変化した面が認められる。その変化は主に二つの面から読み取れる。一つは光島との初対面の場所は、日本の門司であったが、その変化が起こった場所は、満洲の新京であったことである。一方、筧子が新京のホテルで働いた時に光島と会って、雑談してから印象が変わったことである。つまり、対面場所の変化の上で、筧子自身の変化（働きはじめたこと）も窺えると言えよう。さらに、これらの変化は、日本本土ではなく、「新天地」と呼ばれる満洲の土地で起こったのである。光島に対する印象の変化は、筧子自身の居場所の変化とともに、自分が働き始めたことによって、達成したのだといってもよいのではなからうか。この点については、先に引用した通り、幸福は「筧子自身が自分の手で探し出すもの」と記した事柄を明らかに示していると考えられる。また、居場所の変化については、

当時の社会背景も考慮すると、牛島春子のように日本での思想的、社会的な活動に圧迫感を抱き、新天地としての満洲に「再生」の希望を託して渡ったのである。筧子のこの光島に対する変化は、それを暗示しているといえるのではないかと筆者には見受けられた。

#### 〈その二〉卓次たくじ（筧子の幼馴染み）の幼馴染の人、筧子の好きな人

この人物は「私」の昔の思い出の中に登場する。そして、卓次の付き合いは、「女学校を出たばかりの頃」のことであるため、光島より早く出てきた人物である。さらに、卓次は、筧子自身の主観的な「幸福」観にかかわる重要な人物である。

卓次という人について、光島のように私が、直接に筧子に紹介してあげたわけではないが、筧子と卓次の交際は、やはり「私」とも分けられない関係がある。それは、筧子が卓次を好きだといふことが分かった後、「私」は「その卓次さんに筧子に手紙をやってくれたら嬉しいと匿名の手紙を書いた」ため、その手紙のおかげで、卓次と筧子の交際が始まったからである。ようするに、卓次と筧子の間では、「私」の存在も明らかに見逃すことができないのである。

さらに、この人は三人の男の中で、筧子が明らかに「好きだ」と言った、ただの一人なのである。卓次は筧子の従兄の親友で、二人は幼馴染であった。昔、「私」は地下運動のため投獄されたが、刑務所を出てから「筧子と卓次は結ばれたらうか、筧子は幸福

になつてゐるだらうか」と思ひ出している。つまり、笙子と卓次の二人は幸福になつてほしいと「私」は考えていた。笙子自身も積極的に好意をもち、「私」自身もそのことを認めている。笙子が直接に「幸福」だと言っているわけではないが、「好き」―「結婚」―「幸福」という流れを、笙子も「私」も二人が心の中で認めていると考えられる。

しかし、笙子は卓次のただ一つのつまらない言葉（彼は笙子の叔母の家で笙子さんから手紙をもらつたと言つたこと）のため、交際をやめた。これは笙子の「神経質」な性格が卓次の言葉を許せなかつたためだと言えらる。つまり、卓次の場合は、笙子自身から先に付き合ひをやめたのである。これは前の光島と正反對である。それにしても、「ただあの人が、あんなにきれいで、お金持ちではなかつたら私は結婚したかもしれないけれども」と言つて、自分の行為に対して、精神面では負けられないという内心の強さと異性への特殊な潔癖さが現われている。

一方、「私」の方は、卓次について、直接に自責などの表現は出てこなかつたが、この二人が最後まで幸福にならなかつたことに對して、「笙子のやうな女は結局どうなることであらう。笙子は不幸を、もはや自らの中に持つてゐる女なのではないか」、「私はもうすこし笙子を知るべきであつた」と笙子の結婚、未来などについて、強く不安を感じたことが描かれている。卓次は笙子の「幸福」に繋がる最初の男性であるにもかかわらず、笙子の主観的判斷で失敗してしまふ。この点については、光島と違つて、他人か

ら疎遠されたのではなく、笙子自身から手を離したと描いている。そのため、「私」の匿名の手紙について、表面的には「私」は笙子を幸福の道に助けてあげたのだと見ることが出来る。しかし、笙子自身がこのチャンス逃してしまつたのだ。さらに、卓次について、「ただあの人が、あんなにきれいで、お金持でなかつたら私は結婚したかもしれないけれども」というように、「彼女の虚栄が潜んでゐるのではないか」という「私」の心理描写がある。これについては、「私」が笙子を幸福にさせたい責任感、結局、笙子自身の異性に対する強い潔癖さによつて達成できなかった。二人の意識内では、いずれも一種の強い自己主張を示しているのである。こうしてみると、「卓次」のエピソードにおいて重視すべき部分は、二人の女性主人公はお互いに影響し合ひ、繋がつていることが三人の男性の中で、最も鮮明に描かれている部分であると言えらる。具体的に示すと、

笙子の片思い↓「私」の匿名手紙↓笙子の恋愛↓「私」の満足↓  
笙子の恋愛の失敗

という流れで二人と卓次との関わりが交差して、「あざなはれ」といふようにみえるのではなからうか。この部分における「私」が、前の光島のエピソードと比べて異なつてゐるのは、前の光島の部分における「私」の自責は、自己反省の意味があると考えられる。一方、卓次における「私」の役割は、自己主張に変わつてゐるの

ではないかと考える。

### 〈その三〉川瀬（筧子の夫）

川瀬は筧子の夫として、筧子の最後の運命を決める人である。そのため、川瀬のエピソードは全作品において、最も多い分量を占めている。次は、川瀬における「私」の自責について、作中どのように描かれているのか。更に、「私」と筧子の二人の關係とどのように関わっているのかについて考察したい。

川瀬のエピソードでは、「私」の自責は、前に引用した中の㊦㊧の三回出てきている。これらの自責の理由といえば、それは、筧子が結婚後、川瀬家でいろいろ不幸に遭ったことである。しかし、この自責の深層は、二人の繋がりとどのような關係があるのかについて、検討しなければならない。次は三回の自責の場面をそれぞれ見ておく。

㊦が語っているのは、結婚後、「私」の初めて後悔・自責を感じた対象は、川瀬のお母さんの存在のことである。しかし、「私」はすぐ筧子の方にも反省させた。続いて引用すると、

筧子は私など及びもつかぬやうに正直で清潔な心をもった女であるけれど、それは魚の住み難い水の清さに似てゐるかもしれない。永い間ひとの中でもまれて来たために心にもない強がりや見栄で彼女の素直さを粉飾してゐる所もある。

はきはきした物云ひがどうかすると相手に切口上に聞こえて、

私も筧子の物の云ひ方にこだはつたこともいくどかあつた。私はそのことを一度何かの折に筧子に云つたことがあつた。すると筧子は、「私はちつとも勝気ぢやないのよ。」とすつかり悄気てしまつた。それが本當の筧子なのだ。

この引用からは、筧子の結婚前後の変化が窺える。結婚前の筧子について「心にもない強がりや見栄で彼女の素直さを粉飾してゐる所」があるというのは、この前の卓次との交際に反映されていた点である。作品前半において、最も鮮明的な印象といえば、「精神的な面の強」かつた点といえよう。しかし、ここでは、筧子の答えとして「私はちつとも勝気ぢやないのよ。」というように筧子は、結婚後、若い時からの「強さ」「虚栄」などの精神的強さが、すべて変わってしまったのである。しかも、「それが本當の筧子」と見られる。つまり、筧子の若い時に現れた「強さ」は内心における弱さを隠すために、わざとつけた仮面なのではないか。本當の筧子の内部における「筧子の正体」は、その川瀬との結婚によって、表面に付けていた仮面を外したのであるうか。

この㊦の自責を通じて、筧子の結婚前と結婚後の精神的变化を窺うことができる。つまり、筧子の外部的強さは、実は内心の弱さを隠すための手段だと見ることができるのである。これは、筧子自身の一種の対立と言えるのではないか。

㊧と㊨については、すべて直接かつ単純に「筧子に濟まない」気持ちを描いている。㊧については、「私」が再び奉天へ戻ってき

た直後であり、㊦については、笙子がなくなる前の最後の面会ということになる。注目すべきは、この二回の「自責」は、前の㊧と比べると、明らかに「私」の笙子に対する自省などが出てこなかった点である。すなわち、㊨の中に描かれている「本當の笙子」は、その後、そのまま、「私」の内部、そして笙子の内部において、受け止められたのではないだろうか。しかし、笙子の結婚前の描写から見ると、この「本當の笙子」は、笙子本人が結婚後にもう一つの人生を選んだのではないかと読み取ることができた。

さて、笙子が三人の男性と出会ったことは、事実かどうか判断できないが、作品を読む限りでは、この三人の男性とは、三人三様の付き合いであった。それは笙子の結婚に対する心情の変化と対応するものではなからうか。若い時に男性に対して強く潔癖さを持つていたが、最後の結婚相手・川瀬に辿った時、以前の自分の考えとはまったく反対になって、笙子に或いは、笙子とあざなわれている「私」にとつては、元々自分の内部において対立しているものを受容したことによる変化とも言えるだろう。「私」がずっと貫いている「自責」の心情は、深層においては、ただの「自責」ではなく、もはや「私」の自分自身の内部におけるもう一つの自分の生き方への抵抗と受容というべきではないか。

#### 四、笙子の「死」——その決別の意味

作品の冒頭の部分の一文「青木笙子は、七月のはじめ、福岡の

国立築紫病院で永眠した」といったように、作品の冒頭からはずきりと「死」というモチーフを取り上げている。要するに作品は回想の形で笙子の死から以前のことを回想している。作者は作品全体を笙子の死に基づき、進めているのが分かる。言い換えるなら、この死の問題は、作品の根幹、或いは出発点と見ることでできる存在であろう。結末においては、冒頭と呼応するように、また、「私」の死に対する心情の変化をもって作品が閉じられる。したがって、その死については、どのような解釈を与えたらよいのだろうか。二人の繋がりと笙子の「死」はどのように関連づけられているのかを考察する必要がある。

作品冒頭の「私」の語りは笙子が既になくなった後の時期である。そして、「私」は死に対して、「身近かな者の死については全然自信がない。」「死といふものが物理的なものである」「やはり私にはまだ不可解である」などのような消極的なイメージを持っている。しかし、作品の結末においては、

おそらく死は笙子の上に厳肅にそしてさりげなくやつて来たにちがひない。そして笙子の肉体を柔らかに抱きとつたことであらう。私はさうした死を想ふ時、急に死に対して親しみすら感じ始めた。

と冒頭の描写と正反対の心情に変わっている。前節の論に基づいてみるなら、「私」が笙子の死をきっかけに「死」に親しみを感

始めたのは、今まで「私」と「あざなはれた一本の縄」で結ばれていた筧子は、「私」の内部に隠れているもう一人の「私」（「私」の分身と言えるだろう）を殺し、死を恐ろしくはない新しい「私」として蘇生しているのは間違いない。環境は大いに変わったにもかかわらず、二人だけのつながりは死ぬまで変わらない。さらに筧子の「死」によって、二人が統一されたことになった、と解するのはないか。

『筧子』は間違いなく牛島の友人の女性をモデルとし、二人の敗戦後の満洲を舞台とし、二人のつながりを主材料にして展開しようとした「私」の分身が幻滅された物語であると結論づけることができよう。筧子は私の若い時からの親しい友人であるが、二人の内部はすでに融合されたといえるだろう。筧子こそが、「私」の等身大の分身だったからと言えらるからである。そのため、筧子の死は「私」に対し、恐れさせるどころか、自分の内部にある分身との矛盾が解決したことを意味しているのではなからうか。

本作品は、作家・牛島の戦後文学活動の再出発として、自分の引揚げ体験を題材とし、人間の生と死、自己救済などの問題を文学のかたちで表面化するものと見ればよからう。

最初の「死」に対する考えというのは、二人はもともと「死」に対して、恐れる人間だということができる。「私」の方は明らかに「私は昔から何よりも死を恐れる人間の一人であった。」と作中で述べられている。筧子については、川瀬家で寄食している「私」が兵隊達の前に自分をなげだそうかと思う時、筧子も

「私もいくわ。そして離縁してもらわ。でも私死にはしないわよ、死ぬもんですか。」

というセリフがある。ここでは筧子の死生観が現われている。つまり、筧子は「私」と同じように最初から死を恐れる人間だといえるだろう。

前述した通り、作品は筧子の「死」から始まって、「死」をもって閉じているのである。明らかにその「死」は、作品全体を貫く特別な役割を果たしている。さて、筧子の「死」は「私」にとってどのような意味を持つのか。さらに、作品の題材とした「引揚げ」から見れば、引揚げと「生と死」との関係について、どのように理解したらよいのかを検討しなければなるまい。前の節では、「私」と筧子の関係について、考察してきた。ところが、牛島の満洲時代作品も含めて見渡すと、「死」というモチーフがしばしば出てきているのである。在満（あるいは戦中）時代の作品の中で、牛島はその「死」の問題について、引揚げ関係作品と比べて、変化はあるかどうか。もし変化があれば、どのような違いがあるのか。この変化が出てくる理由は何だろうか。さらに、牛島文学における「死生観」とは、いかなる存在としてあるのか、などについては、あらためて大きな課題として設定しなければなるまい。

さて、これまでの私の「死」に対する態度の変化は何故なのか



について読者たちはもっとも思考すべきことになるだろう。筆者は、これまでの分析により、自分なりの観点を述べたいと思う。

牛島の引揚げ作品群第一作「笹子」をはじめ、作品群を全体的に把握すれば、作家・牛島は主人公「笹子」と自身を投影した「私」を通して、戦後の引揚げ体験という非日常的環境における「生」と「死」に関する深層的なものを語りたかったのではないかと考える。また、『笹子』という作品をもって、戦争（満洲）時代の自分と決別しなかったのではなからうか。この作品は作者が自分の満洲時代を総決算するとともに、戦後を再出発するのだと装った小説と言えるだろう。

「私」自身として、夫と離れて、三人の子供をつれ、孤独を感じながら、生き続けている「私」の姿も描かれている。「死」が恐ろしいものであり、「生」もまた苦しいものであるからこそ、人間は信仰というものを創り出したのである。そして、その恐ろしい「死」の後に絶対的な安楽を得るために、「生」の苦しみに耐えて、より良く「生きる」ことを自らに課すという仏教的な思想を感じさせてくれるのではないだろうか。これらの作品群は単純な自伝的小説ではなく、人間の死生観に関わる深層的な問題が潜んでいるのではないかと筆者は考えている。

笹子の人生・運命の変化が、「私」と繋がっているように見える。語り手の「私」の役割はどのように理解すればよいのか。作者は笹子のことを借りて、「私」のことを言わんとしているのではないか。「私」と笹子はそれぞれ違う道に踏み込んだが、実際に二人の

人生は同じ方向に向っているというように描いていることもあり得ると私は考える。

牛島のほかの作品を並べてみると、「生」と「死」にかかわる描写がしばしば登場している。「生」と「死」の問題は、作家・牛島にとつて、自分の文学世界において、極めて重要な位置づけがあると考えられる。また、『雪空』において、秋田という日本人指導官の戦死について描いているなど、牛島の文学世界の深層を探求すればするほど、生と死の問題は見逃すことができないと考えられる。

ここで、改めて主人公の「笹子」という名前を振り返り、少し意味深いものに気がつく。多田茂治『重い鎖——牛島春子の昭和史』<sup>(6)</sup>で、作中の主人公笹子の名前のことについて触れられている。作中では「私」と笹子を同級生と記しているが、実際には、牛島が昭和四年三月に卒業した久留米高等女学校当時の同級生名簿を確認した結果、「青木笹子」という名は出てこない。これは牛島の創作名であることが確かである。牛島は、なぜこの引揚げ第一作の主人公の名前をこのように設定したのか。作品の全体を読み終えた後、改めて考える必要があると思う。実は「笹子」の「笹」はある意味でいえば、「生」の意味を暗示しているのではないだろうか。つまり、笹子は一生をかけて「生きる」、「幸せに生きる」ことを追求していると彼女の名前の設定から覗うことができよう。これはもちろん、この一つの作品だけではなく、引揚げ文学における一つの大きなテーマと考えられるので、今後の研究において、

ほかの作品も視野に入れて継続的に注目していきたい。

## おわりに——戦後初期の文学における女性

本稿は、牛島の引揚げ小説第一作『筥子』をめぐる、二人の女性主人公のつながりと「私」の死に対する心情の変化について考察した。主人公筥子が結婚に至るまでの道は紆余曲折であり、ようやく結婚に辿ったものの、結婚生活が予想外に不幸であって、結局、死への道を歩んだ。本稿を閉じるに当たって、再び、作品の冒頭で二人の「あざなはれた一本の縄」のような関係を振り返ると、筥子と「私」という主人公は、すでにお互いに、相手の人生に溶け込み、一人が亡くなったことよって、もう一人の「私」は、この死に支えられて、次の新しい人生を迎えることができるため、「死」に対して、親しみさえ感じてきたのだ。昔、「私」として「不可解」な死は、分身的な存在である筥子に実現されたことよって、人間としての「私」には、今までの「死」に対する表面的な認識を超えて、「死」に対する内的な本質まで、考えることができたといえるだろう。作品は、筥子を描くことよって、私自身が二つの人生の選択肢に対して、筥子が象徴している過去の自分自身との決別を実現したことを表現し、筥子は「私」の身代わりに犠牲となったのではないか。「私」は自分の過去を振り返り、筥子の死は「私」のこれからの人生のスプリングボードのような存在ではなからうか。「私」は、過去の人生と徹底的に決

別し、これまでと違う生き方で生きていかなければならないことと暗示していると言えるだろう。

戦後の文学作品においては、女性を主人公とする作品は、数多く存する。これらの作品における女性の登場人物のあり方を詳細に検討・考察することよって、戦後文学における女性像を一層明らかとすることを今後の研究課題としたい。

## △注▽

- (1) 牛島の年譜によると、彼女が日本に引揚げてきた年（一九四六年）の十月、「短編小説「手紙」を『九州文化新聞』第十四号に発表」と記しているが、筆者は未見。各作品集でも転載されていないようである。
- (2) 例えば、拘置所生活を描いた作品「秋深かむ窓」（『女人藝術』一九四九、一）がある。
- (3) 例えば、成田龍一「引揚げと抑留」『アジア太平洋戦争4』『帝国の戦争経験』（岩波書店、二〇〇六年二月）、田中益三「牛島の戦前・戦後」（『朱夏』第十八号、二〇〇三年六月）、多田茂治『満州・重い鎖—牛島春子の昭和史』（弦書房、二〇〇九年七月）などの評論は、ほとんどテクストを引用しながら、主人公における「解放」、また、すなわち性差を乗り越えるなどを読み取るものである。
- (4) 本稿で本文の引用は川村濤監修『牛島春子作品集』（ゆまに書房、二〇〇一、五）に拠った。
- (5) 『日本国語大辞典』第一巻（小学館、二〇〇〇年十一月）二七六頁。
- (6) 前掲書一五二頁、註1。

主指導教員（橋谷英子教授）、副指導教員（廣部俊也准教授・堀竜一准教授）